

私たちは世界をどう理解しているか？ 赤ちゃんと「ことば」を通して考える

今井むつみさんに聞く



いまい・むつみ
慶應義塾大学環境情報学部教授。1994年、ノースウェスタン大学心理学部よりPh.D取得。慶應義塾大学助手、専任講師を経て、06年より現職。専門は、認知科学、言語心理学、発達心理学。著書に、「ことばの学習のハードックス」(共立出版)「レキシコンの構築」(共著/岩波書店)、「人が学ぶということ―認知学習論からの視点」(共著/北樹出版)、「ことばと思考」(岩波新書)などがある。

ではないかと推測するようになり、その経験が蓄積されていった結果、2歳の誕生日を迎える前後には堰を切ったかのようにしゃべり始めるんです。これは「語彙爆発の現象」と呼ばれており、この時期になると、子どもは平均して1日に6語ほど、多い時には10語もの新しい単語を覚えていくんです」

「ことば」を超える普遍性、赤ちゃんの「素朴理論」

ただ、赤ちゃんがまったたく何も知っていないかという点、それは違うと今井さんは言う。

「人間は、完全にまっさらな白紙状態から何かを学ぶことはできません。かつては赤ちゃんも、まったたくの無知の状態で生まれてくると考えられていました。しかし、生後4日しか経たない赤ちゃんでも、テープに録音した声を聞かせると、すでに外国語より母語をより好むという研究結果が報告されています。また、普通に録音したものと、それを逆回転にして流した音を聞かせると、やはり普通にスピーチしているほうを好むこともわかっています。言語学習はお母さんのお腹の中にある頃からすでに始まっているのです。もともと、お腹の中で聞こえる音は非常に限られており、音声の強弱や上がり下がり、リズムや母音の響きくらい。つまり声全体の調子はわかって、具体的には何を言っ

いるかまでは聞こえません。それでも赤ちゃんは、母語のリズムを何となく漠然とながらつかんでおり、おそらく本能的に、ことばがコミュニケーションの手段であることを、わかっているのです」

赤ちゃんは「知識」ともいえないような知識をもつて、生まれてくる。しかし、それはどのような知識なのだろうか？ 残念ながら乳児は大人のように言語で説明してくれないため、正確なところはわからない。だが彼らは私たちが想像する以上に、多くの「この世の理」を理解していることが、さまざまな研究から明らかになりつつある。

たとえば、水と砂の性質は違うこと、目の前から人形が消えても、それは消失したわけではなく隠されただけであること、人間や動物は自分の意思で動けるが、おもちゃは自ら移動しないこと、1つ、2つといった数の簡単な足し算引き算すら赤ちゃんはできる。しかし、赤ちゃんがそのようなさまざまな知識をもっているという点をどうやって調べるのだろうか。

たとえば足し算ができる、というところを見るには次のような実験をする。まず、乳児の目の前に人形を1体置き、ついででそれを隠す。次に、ついでの後ろにもう1体の人形を持った手が入っていき、その後何も持っていない空の手が戻っていくというシーンを見せるのだ。再びついでをはず



して赤ちゃんの反応を見る。(赤ちゃんが計算した結果期待したとおり)そこに人形が2体あれば、赤ちゃんはチラリと見るだけだが、もしそこに(最初に目撃したとおりの)1体しかないとなると、赤ちゃんは何かが「変だ」と思い、ジッと眺める。その注視時間の差を計るのだ。そのような実験を繰り返してわかってきた赤ちゃんの知識、それは「素朴理論」と呼ばれている。

「上から落ちてきた物体が空中で突然止まれば『不思議だ』とわかる力、周囲の人間の感情を推察する力など、かなり多くのことを赤ちゃんは生まれながらに知っています。言語学者ノーム・チョムスキーは、人は生得的に言語を超えた普遍文法をもつて生まれてくる」と唱えましたが、この「文法」とはメタファーとしてとらえることもできるのではないのでしょうか。つまり先に挙げたような「言語を超えた普遍性」としての素朴力学のような「知識」を足がかりとして、赤ちゃんは「ことば」という記号に挑んでいるということなんです」

人はどのようにして「ことば」を学んでいくのだろうか？ 子どもと大人の双方を研究対象に、人の認識とことばがどのような関係にあるのかを研究している今井むつみさん(慶應義塾大学環境情報学部教授)に「子どもがことばを獲得していくプロセスとその不思議」について聞いた。

大人とまったく違う、赤ちゃんの言語習得

先日まで床に転がり「ダー」「プー」くらいしか言えなかった赤ちゃんが、気がつくといひ歩きをし、「マンマ」「アッチ」としゃべり始めている。赤ちゃんがことばを学んでいく時、一体どんなプロセスをたどるのだろうか？

「大人が外国語を学ぶのと、赤ちゃんが母語を獲得していく過程とは、まったく学びの概念も方法も異なるものなんです」と、今井むつみさんは話す。

「ロビンソン・クルーソーのように未知の土地に一人で漂流してしまい、現地の人とまったくわからない現地の言語でコミュニケーションをとらざるを得ないような場合は別ですが、基本的に大人が外国語を学ぶ時は、文法書と辞書を手がかりに学んでいきますよね。でもそれが可能なのは、「ことば」は、単語という単位の組み合わせで構成されており、そこには文法という規則が存在する」ということを、私たちがすでに知っているからです。ところが赤ちゃんは、そんなことすら知らずに

母語との違いを楽しむ、大人の外国語学習

一方、大人の外国語習得は、幼児のそれとはまったく異なる方法で攻めなければダメだと今井さんは指摘する。

「よく『浴びるように外国語を聞けば、赤ちゃんと同じように言語を吸収できる』といいますが、でもそれは間違いです。長い時間その言語に接することは大切ですが、我々大人が言語を学習する場合は、ただ聞き流しているだけでは効果はありません。むしろ自分の母語との違いを意識しながら、その差異を楽しまなくては。あとは、ことばの意味を深く追求すること。私たちはつい、文法さえマスターすれば大丈夫と思いがちですが、文法以上に大切なのは、ことばの意味です。辞書を開けば確かにそこには意味は書いてありますが、でもそれは、私たちの母語で無理やり説明したものにすぎません。その背後にはもっと深い意味、



「ことばと思考」今井むつみ著 岩波新書 840円

その国で暗黙裡に使われている用法などがたくさん隠れているのです。子どもはそれを自分の体感で習得してしまいましたが、一度母語を習得してしまっただけではそれがとても難しい。だからこそ一つひとつのことばの意味をなおざりにすることなく、丹念に体得していく作業が大切なんです」

今井さんが自ら言い聞かせているのは、「目標を『ネイティブ並みに話せること』に設定しない」ということだ。バイリンガルでさえ、必ずどちらかの言語に偏っているのが普通だ。ネイティブと同じように話せないことにストレスを感じるのではなく、母語との違いを「そうなんだ」と楽しむことこそが、未知の「ことば」を知る醍醐味なのである。

「私のやっている認知心理学とは、人の心のしくみを理解する学問です。『見る』『聞く』『話す』『記憶する』『推測する』……私たちが普段何気なく行っている作業が、実際にはどのような行われたいのかを知る学問。私たち人間がどうやって「ことば」を獲得していくのかを知ることは、ひいては「私たちが世界をどう理解しているのか」を解き明かすことにもつながるのではないのでしょうか」

③(三浦愛美)



生まれてきます。誰にも教わらず、意味の単位である単語というものを自分で発見していくわけなんです」

一般的に、乳児は7ヵ月半頃になると、周囲の大人たちの会話から単語を聞きだせるようになるという。音の強弱やリズムで、単語の切り目を推測し、一連の音から単語を切り出せるようになるのだ。

「私たちは、『これはねこよ』と言われれば、目の前にいる動物が「ねこ」という名前なのだを推測できます。でも、生後間もない赤ちゃんは、まず、その一連の音が「これ」「は」「ねこ」「よ」という単語に分けられること、それぞ

れの音が何かしらの役割と意味をもっていることを推察するところから始めなくてはならないですね」

そして1歳2ヵ月〜1歳半頃になると、その切り出した単語に、意味を当てていく作業が始まる。

「何かを見ていて、ある単語が聞こえてくれば、それは今自分が見ている対象のことを指しているの